

# 刷り込まれたグレート・マザーへの鉄の意志

——『千枚皮』(KHM六五)の深層心理学的解釈——

梅 内 幸 信

## 第一節 人間の模倣本能

模倣する本能を人間の本質的一面と見なす考えは、すでに古代ギリシアにおいて見いだされる。ギリシアの唯物論哲学者であるデモクリトス(Demokritos, um 460 v.Chr.- um 370 v.Chr.)は、模倣するという点において、人間は動物の弟子であるとし、「織ったり縫ったりすることについては蜘蛛の、家造りにおいては燕の、歌においては甘い声の白鳥やナイチンゲール<sup>①</sup>」の弟子であると考えた。他方、彼はまた、「人は善くあるべきである、もしくは善き人を模倣すべきである<sup>②</sup>」という見解によって、模倣の本能を倫理的価値観と結びつけたのである。模倣に関する二つの見解、すなわち、自然の模倣と価値的なるものの模倣という見解をその形而上哲学において統合したのは、かの偉大なギリシアの哲学者プラトン(Platon, 427 v.Chr.-347 v.Chr.)であった。プラトンの「神と人とは理性という黄金の糸で結ばれており(『法律』)、ロゴスを有するという固有のあり方において人は本来的に神に似ている<sup>③</sup>」という考えは、模倣概念との関連において非常に示唆に富む見解である。この形而上学的なミメーシス(模倣)の理念を、現実的な意味において焼き直したのが、アリスト

刷り込まれたグレート・マザーへの鉄の意志

テレス (Aristoteles, 384 v. Chr.-322 v. Chr.) である。彼は、その『詩学』において、ポイエーシス (創作・創造) はミメーシスであり、悲劇のポイエーシスは「人生と行為のミメーシス」<sup>(4)</sup>として、歴史的記述とは異なり、「起こりうること」「普遍的な(生の)ありよう」<sup>(5)</sup>を語ることから、ミメーシスはもはや単なる現実的事象の模倣ではないと考えたのであった。

ミメーシスの概念に関しては、ギリシア時代以来延々と種々の論議が巻き起こされてきたが、現代に至ってアウエルバッハ (Erich Auerbach, 1892-1957) は、一九四六年に、ミメーシスという概念をキーワードとしてヨーロッパ文学における現実描写を見直した大著『ミメーシス』<sup>(6)</sup>を公刊している。また、動物の模倣本能に関して、一九七三年にノーベル生理学医学賞を獲得したオーストリアの動物学者ローレンツ (Konrad Zacharias Lorenz, 1903-1989) は、ハイイロガンの雛が生後一、二日以内に「自分の周囲で動くもの」を、あたかも親と見なして追従する「刷り込み」現象を発見し、このことを契機として、生得的な固定的行動型をもたらす「リリーサー」を研究している<sup>(7)</sup>。このように、人間の模倣本能に関する概念の歴史的過程を簡単に垣間見るだけでも、模倣本能が人間においていかに本質的な役割を果たしているかが分かるであろう。上述した模倣概念を極めて善意に受け止めれば、人間は、生まれて後短期間に、自分の周囲にいる両親の善い面を自分の魂に刷り込むと考えられる。しかしながら、人間社会を観察し、少なからず悪がはびこっている現実を考慮に入れると、「両親の善い面」のみを刷り込むという点は、現実世界において必ずしも妥当性をもたないのかも知れない。とはいえ、その他の部分、すなわち「人間は、生まれて後短期間に、自分の周囲にいる両親の行動様式を自分の魂に刷り込む」ものであるという点は、かなりの妥当性を獲得するであろう。ところが、驚くべきことに、さきほど部分的に除外した「両親の善い面を刷り込む」という点までもが見事に当てはまると思われる童話が存在しているのである。それは、『グリム童話集』における『千枚皮』(KHM六五)と題された次のような物語である。

## 第二節 近親相姦の危機

昔、あるところに王がいて、この王には「金の髪のお妃さまがあり、お妃さまは、それはもう美しく、この世にくらべる人がいないほどの美人」であつた。ところが、この妃は、まもなく病の床に臥し、自分の死期を悟ると、王に次のように語る。

「わたくしが死んだのち、もし、また結婚なさるおつもりであるならば、わたくしと同じくらい美しく、わたくしと同じような金の髪の人でなければ、結婚なさらないでください。このことを、わたくしにかたくお約束ください。」

(S.350)

「自分と同じように美しく、自分と同じような金の髪をもった女性とでなければ結婚しないこと」を夫に求める妃の遺言は、なんとも奇妙なものである。自分よりも器量において劣った女性と結婚することは、妃の自尊心を傷つけるとも言うのである。それとも、このような難しい遺言を遺さなければ、この王は、安易に後妻を迎えてしまうような男性なのであろうか。ユングの深層心理学によれば、男性の無意識の中にあつて抑圧されている異性原理、すなわちアニマは、その成長過程に応じて、「娼婦——聖女——賢女」といったイメージをもつと言われる。この図式に従えば、この王の女性に対するイメージは、せいぜい「聖女」どまりであらうと推測される。死んでゆく妃としても、やはり、心配せずにはおられないならかの理由があるのであろう。

さて、王は、長いこと悲しみに暮れ、二度目の妃を迎えるなどということは思いもよらなかつた。しかし、国政上相談

役たちが、新たな妃を迎える必要を国王に進言するに至り、あちこちに使いの者が出されても、亡くなった妃に匹敵するような花嫁は見つからなかったのである。ようやく、ふさわしいような美人が見つかったかと思えば、亡くなった妃のような「金の髪の」女性ではないのであった。ところが、あるとき王が、自分の一人娘をよく眺めてみると、この娘が、なにからなまでに母親そっくりの美人なのであった。そこで、王は、この自分の娘に急に激しい愛情を覚えて、自分の娘と結婚すると言いだすのである。これを聞いて、相談役たちは、「父親が実の娘と結婚することは、神さまが禁じております。罪深いことから、良い結果が生まれたためしはございません。お国も、その災いをこうむって、滅びることになります。どうぞ」(S.351)と諫めて、王がその決意を翻すよう促すのであるが、それにもかかわらず王は、その決意を変えようとはしない。娘の方は、父親の決意を聞いて、相談役たち以上に驚くのであるが、しかし、その決意を変える望みを捨てず、父親の決意を変えようとして、次のような難題を父親に提示する。

「わたしが、おとうさまの願いをかなえます前に、まず、わたしは、三着の衣装をいただきとう存じます。その一着は、お日さまのように金色に輝くもの、もう一着は、お月さまのように銀色に輝くもの、最後の一着は、お星さまのように青白く輝くものをいただきとう存じます。さらには、千種類の毛皮から作られました外套を一着いただきとう存じます。そのためには、おとうさまのお国にすむ動物という動物がみな、その皮を一切れずつさしださなければなりません。」(S.351-352)

ところが、この難題をもとめせず王は、国中で一番機織り上手の乙女たちにこれら三着の衣装を織らせ、また、国中の動物を全部捕えさせて、千種類の毛皮を集め、これらを縫い合わせて一着の外套を作り上げさせてしまうのである。そ

の挙げ句、「あすは結婚式じゃぞ」(S.352)と王が言うに及んで、娘は、父親の決意を変えることは不可能だと悟り、逃亡する覚悟を決める。このように、父親の命令に従わず、自らの判断に基づいて自分の行動を決定しているという点において、この姫は、すでにある程度の自立精神を身に付けていると言つて良いであろう。こうして、真夜中に姫は、自分の宝箱の中から「金の指輪」と「小さな金の糸車」、「小さな金の糸巻」を取り出し、例の三着の衣装を「クルミの殻」の中へしまひ込み、「千枚皮の外套」を羽織り、顔と両手に煤を塗つて、真つ黒にする。これら三着の衣装と三つの宝は、物語の後半において、かなり大きな役割を果たすことになる。この段階ですでに、将来のことについて用意周到な準備をしている点において、姫は、この種の行動様式をやはり、自分の母親から学んだか、あるいは無意識のうちに母親の行動様式を刷り込んだとしか考えられない。やがて、旅の準備を整えると、姫は、城を出て、夜通し歩いて大きな森の中へたどり着き、そこで疲れて、木の洞の中に入って眠り込んでしまうのである。

### 第三節 試練の克服

あくる日、真昼になつても姫は、眠り続けたままであった。すると、その森を所有している王が、たまたまこの森で狩をしていたが、獵犬が木の洞の中で寝ている姫を嗅ぎつけて、木の周りで吠えたのであった。王の命令を受けた狩人たちによつて生け捕りにされると、姫は、「あたしは、父母にも見捨てられた、あわれな子どもです。どうか、あわれんで、いっしょにつれていってください」(S.353)と訴える。こうして姫は、王の城の台所の灰かき集めの仕事のために雇われることとなる。城に着くと、狩人たちは、姫に「階段の下にある、日のさしこまない小さな家畜小屋」(S.353)をあてがう。それ以来、姫は、本来の高貴な身分にもかかわらず、台所で「まきや水を運んだり、火をおこしたり、鳥の羽を

むしつたり、野菜をより分けたり、灰をかいたり、いやな仕事」(S.353)をなんでもこなすのである。「姫」という身分に生まれた女性が、父親との近親相姦という危機を回避するために、止むを得ず他国に逃亡したとはいえ、果たしてそう簡単に、「家畜小屋」に住んだり、あらゆる辛い台所仕事を、なんらの嘆きや涙無しに堪えきれれるものであろうか。この姫の強い意志と勇気と忍耐を考察するとき、読者は、賛嘆の念ばかりではなく、畏怖の念すら感ぜざるをえない。

姫は、「千枚皮」と呼ばれ、長い間非常に惨めな生活を送らざるをえなかった。ところが、ある日城で宴会が開かれることになる、千枚皮は、料理番に頼んで三〇分だけ上の階に行つて、宴会の様子を眺めることを許されるのである。料理番の許可をもらつと、千枚皮は、自分の家畜小屋に戻り、毛皮の外套を脱いで、顔と両手に塗つてある煤を洗い落とし、クルミを開けて「お日さまのように、金色に輝く」衣装を身にまとい、宴会に参加する。すると、宴会に集まつた人々は、どこかの国の姫に違いないと考える。王は、千枚皮の美しさに驚きながらも、千枚皮に踊りの相手を申し込む。しかし、踊りが終わると、千枚皮は、宴会場から姿をくらます。集まつた人々にも、さらには、見張りたちにも、千枚皮の行方は全く分からないのであつた。

千枚皮はいえ、自分の小さな家畜小屋に駆け込んで、すばやく衣装を脱ぎ捨て、顔と両手を黒く塗つて、毛皮の外套を羽織り、元の姿に戻つていたのである。こうして、千枚皮が台所で灰をかき集めようとすると、料理番が、王に差し上げるスープを作ることを千枚皮に命ずる。千枚皮は、思う存分腕を振るつて、パンスープを作る。ところが、このスープが出来上がると、千枚皮は、自分の小さな家畜小屋から「金の指輪」を取つてきて、これをスープを盛りつける深皿の中に置く。王は、それほどまでに美味しいスープを食べたことがなかった。さらに、食べ終わつて、皿の底に金の指輪を発見すると、訝しく思い、料理番を呼んで、誰がスープを作つたのかを問いただす。料理番が、スープを作つたのは千枚皮であることを王に白状すると、今度は千枚皮が王によって呼び出されることとなる。王は、出頭した千枚皮にその素性

を尋ねるが、しかし、千枚皮は、自分を卑下し、次のように答えるばかりである。

「わたしは、なんの役にも立たぬものにございます。そそうをして、履物を頭に投げつけられるのが関の山にございます。」(S:355)

千枚皮のこの返事は、この場面において若干唐突な印象を与える。しかしながら、この返事こそが、ペローの童話『ろばの皮』から影響を被っているという理由で第二版において削除された『ネズミ皮の姫』の『千枚皮』に与えた「筋の亀裂」に他ならないと解釈されるのである<sup>(10)</sup>。もちろん千枚皮は、王が金の指輪のことを聞いても、存じませんと応えるのみである。こうして、千枚皮は、王のもとから下がるのであるが、しばらくすると、再び宴会が開かれることとなり、またしても同じような場面が繰り返される。しかし、二度目に千枚皮は、「お月さまのように銀色に輝く衣装」を身にまとう。そして、王と踊った後に台所へ逃げ帰ると、パンスープを盛りつけた深皿の底に、今度は「金の糸車」を置く。この後、またしても、ほぼ一回目と同じような事態が展開することとなるのである。

しかしながら、千枚皮が、「お星さまのように青白く輝く衣装」を身にまとって、三度目の宴会に出ると、王は、踊りの最中に、こっそりと千枚皮の指に例の金の指輪をはめるという手段を採る。さらに、舞踏会を長引かせるように命じておいた王の策略によって、千枚皮は、一時間以上も宴会場に留まらざるをえなくなり、必死に自分の小さな家畜小屋に逃げ帰っても、美しい衣装を脱ぎ捨てる余裕もなく、その上から毛皮の外套を羽織るだけで精一杯で、また、顔と両手に残らず煤を塗ることができず、指が一本白いままになってしまっていたのである。その状態で千枚皮は、台所に戻って、例のパンスープを作り、三度目には「金の糸巻」を皿の底に置く。三度目に千枚皮が呼び出されると、今度はやはり王も、

煤の塗られていない白い指ばかりではなく、踊りの間にこっそりはめておいた金の指輪にも気づくのである。そこで、王は、千枚皮の手をしっかりとつかんで、握りしめる。思わず千枚皮がその手を振りほどいて逃げようとしたその拍子に、毛皮の外套が少し口を開けて、そこから星の衣装の輝きが漏れでるのである。すると、王がその外套をつかんで引きはがし、千枚皮の金の髪と本当の姿が、全身きらびやかに輝いて現れたので、千枚皮は、もはや身の隠しようがないのであった。千枚皮が絶世の美人であることに気づいた王は、言うまでもなく、千枚皮を花嫁として迎えるのである。

#### 第四節 三つの手段

『千枚皮』の物語を、主人公の行動様式に着目して跡付けるとき、主人公の千枚皮から、「女性の鉄の意志」というものを感得しないではおられない。物語の冒頭において、父親が自分と結婚すると言い張ったときにも、彼女は、すぐさま自暴自棄になることもなく、なんとか父親の決意を変えようと試みている。この態度を見ても、姫は、すでにある程度の智慧を身に付けていると見なさざるをえない。姫の母親も、姫が生まれて、だいぶ成長してから死んだと推測されるので、この母親が姫に「女性の生き方」をある程度教えたか、あるいは姫自身がその模倣本能によって「刷り込んだ」ものと推測される。ある程度の智慧を身に付けていることを前提としなければ、その後の姫の一貫した行動様式は、到底説明のつかないものである。

姫が近親相姦の危機を避けるために、城を出るに当たって、彼女は、父親から婚礼の準備のためにもらった「お日さまのように金色に輝く衣装」と「お月さまのように銀色に輝く衣装」、「お星さまのように青白く輝く衣装」の三着をクルミの殻にしまい込み、さらには、自分の宝箱の中から「金の指輪」と「小さな金の糸車」、「小さな金の糸巻」を携えて行く。



イメージとシンボルによる解釈学の観点から解釈すれば、「指輪」は「結婚、豊穰」と「女の愛情」を象徴的に示し、「糸車」と「糸巻」は共に「女らしさ」<sup>11</sup>を象徴的に示している。

これらの手段を物語の後半部において有効に用いて、千枚皮は、最終的には王の花嫁となるのであるが、一体彼女は、その方法を亡くなった母親から習っていたのであろうか。物語における千枚皮の、迷いのない毅然たる態度を考慮に入れると、やはり、彼女はその方法がある程度亡くなった母親から聞いていたか、あるいは、無意識のうちに模倣したと推定せざるをえない。その方法とは、中世貴族社会における女性の生き方であると同時に、また、亡くなった妃が、自分の夫の花嫁となるときに用いた方法でもあると考えられる。中世の男女の恋愛における女性のあり方に関しては、まず第一に「貞淑と純潔」が求められ、これを守るために、種々の礼儀作法が作られている。この女性のあり方に関する礼儀作法成立の歴史は、古くはオウィディウス (Publius Ovidius Naso, 43 v. Chr. - etwa 17 n. Chr.) の『愛の技法』に遡り、中世においては、トルバドゥールやミンネザングとも関連をもっている<sup>12</sup>。武芸や戦争に明け暮れる騎士たちに反して、その留守を守る女性にとって「貞淑と純潔」が求められるのは当然のことであろう。しかしながら、このことによって逆に、家庭における女性の地位が向上することも、歴史的経過によって証明されるところである。このことに関連して、オットー・ボルストは、『中世ヨーロッパの生活誌』の中で、次のように述べている。

「女性のこういう指導的で模範的な地位はどこからきたのであろうか。貴族や騎士の判断によると——ここではまだ中世初期の戦さ好きの雰囲気のことを考えねばならないが——、女性は婦人部屋<sup>ケメナール</sup>のものである。城の中では女性は身を守ることができない。せいぜい計略や策略を用いるくらいである。貴族や騎士としての戦士の生活が軍事だけをめぐって進行している間に、上流の女性は自由に精神的教養、読書にいそしめた。女性は詩人、歌手、学のある宗教

家を招くことができ——ミンネザングや愛の法廷の起源の一つなのだが——、平和で精神的な活動サークルを生み出すことができた。すでに十二世紀の間に、女性の教養は平均して男性のそれよりも洗練されている（E・ヴェクスラー）。この事実を受入れると、しだいに女性が社会的に有力になっていった理由も分かる。男は美的道徳的教育を女性に負わねばならない。昨日までは家族と領主の意のままにあやつられていた女性が、しだいに重要性を増し、それは文化の進みゆく世俗化の中ですます大きくなっていくのである。<sup>(13)</sup>

上流家庭の女性が、結婚後益々教養を身に付けることが歴史的過程における必然的結果であるとしても、結婚前には自分の母親から女性としての礼儀を学ぶということに、依然として変わりはない。バロックの時代にも、貴族の家庭の女性が、その母親から厳しくしつけられた事実が報告されている。<sup>(14)</sup>このように、中世とバロック時代における女性の礼儀作法を考慮に入れると、上流家庭における女性は、その礼儀作法を自分で学ぶというよりは、むしろ、その母親から教えられたと推定される。そうすると、少しでも賢い女性は、礼儀作法をその母親から学びつつ、同時に、その行動様式をも学び取ったと推測しても、決して的外れにはならないであろう。千枚皮もまた、賢女であったと推定される母親から礼儀作法を学ぶと同時に、母親の賢明な行動様式を自分の中に「刷り込んだ」と解釈される。

このように考えると、千枚皮は、父親の城を去るときまでに、すでに女性としての礼儀作法を学ぶと同時に、女性としての賢明な行動様式を自分の中に刷り込んでいたと考えられる。このような準備過程を経ている女性としては、思春期に入つて、自覚が生ずる、最低一五歳程度の年齢を想定せざるをえないであろう。加えて、父親が娘を結婚の対象として見なすからには、これまた、一五歳程度の年齢に達した女性でなければならぬであろう。そして、千枚皮が、他国の王の城で、台所女中として苦しい生活を送っているうちに、二〇歳前後の年齢に到達したと推定されるのである。

## 第五節 「灰かぶり」との比較

J・ボルテとG・ポリーフカが著した『グリム童話集』に関する詳細な注釈によると、『千枚皮』は、一八二二年一月九日に、カッセルに住むドルトヒエン (Dortchen Wild) から収録されたと言われる<sup>(15)</sup>。さらに、この注釈によると、『千枚皮』は、この童話と類似している『灰かぶり』(KHM二二)とは、その冒頭の部分と女主人公が発見されるその方法によって区別されるという<sup>(16)</sup>。しかしながら、物語の形式面ばかりではなく、その内容面にも立ち入る場合、これら二つの童話に関する類似点と相違点は、さらに詳細な考察を必要としているように思われる。そこで、まず、両者の物語の類似点を列挙してみよう。

### 『千枚皮』と『灰かぶり』との類似点

- 一、『千枚皮』と『灰かぶり』における女主人公は、父親との関係が原因で、様々な試練を課せられる。
- 二、「千枚皮」と「灰かぶり」は、共に三度舞踏会に出かける。
- 三、「千枚皮」と「灰かぶり」は、それぞれ、王と王子の妃となる。

これら二つの童話に関する類似点は、せいぜい以上の三点のみであろう。この二つの童話を比較検討してみると、むしろ、相違点の方が多く見いだされると言わざるをえない。主要な相違点を列挙するだけでも、次の一〇点が挙げられる。

### 『千枚皮』と『灰かぶり』との相違点

刷り込まれたグレート・マザーへの鉄の意志

- 一、『千枚皮』の女主人公は生まれながら「姫」であるが、これに反して、『灰かぶり』の女主人公は「ある金持ちの男の娘」である。
- 二、『千枚皮』は父親のもとを去るが、これに反して、「灰かぶり」は父親のもとを離れない。
- 三、『千枚皮』は、とある王の城における台所で試練に堪えるが、これに反して、「灰かぶり」は自分の家における台所で試練に堪える。
- 四、『千枚皮』は台所で極めて辛い仕事を課されるのではあるが、目に見えて虐待されるという訳ではない。これに反して、「灰かぶり」は、継母を初めとし、義理の姉妹、それどころか、実の父親にも虐待される運命にある。
- 五、『千枚皮』は嘆きも涙もなしに試練に堪えるが、これに反して、「灰かぶり」は絶えず嘆きと涙をもって試練に堪える。
- 六、舞踏会のために着るその衣装を「千枚皮」は最初から自分で所持しているが、これに反して、「灰かぶり」はその衣装をハシバミの木にやつてくる鳥からもらう。
- 七、『千枚皮』の舞踏会での態度には、堂々たる自信と気品が感じられるが、これに反して、「灰かぶり」には、なにかしら自信の無さが感じられる。
- 八、『千枚皮』は父親との近親相姦という危機を体験するが、これに反して、「灰かぶり」は父親との愛情関係の断絶を体験する。
- 九、『千枚皮』において天罰を受ける者は存在しないが、これに反して、『灰かぶり』においては、義理の姉妹を初めとし、継母も父親もなんらかの天罰を受けることとなる。

一〇、「千枚皮」は、その兼ね備えている「勇気と忍耐」によって試練に敢然と堪えるのであるが、これに反して、「灰かぶり」は、試練を涙でもって堪えることによつて「勇気と忍耐」を身に付ける。

このように、『千枚皮』と『灰かぶり』とを、とりわけその内容面から比較・考察するとき、両者の相違が明確に浮かび上がってくる。『千枚皮』は、むしろ、エーレンベルク手稿において第三五番目の童話として収録され、初版第一巻において第七一番目の童話として収録された『ネズミ皮の姫』に類似している<sup>17</sup>。この童話は、ペローの童話『ろばの皮』からの影響が明らかであるという理由で、第二版において削除されてしまったのである。この物語においては、「ネズミ皮」というよりは、シェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616) の『リア王』 (King Lear, 1605-06) におけると同様に、「三人姉妹の父親に対する愛」が中心的モチーフになっている<sup>18</sup>。

『ネズミ皮の姫』はともかく、『千枚皮』も、ペローの童話『ろばの皮』からかなり大きな影響を受けていると思われるのであるが、なぜグリム兄弟は、この童話を第二版以降削除しなかったのであろうか。それだけでなく、二版以降グリム兄弟は、家庭内暴力や殺人、近親相姦、性的描写等を意図的に削除したと言われているのである<sup>19</sup>。にもかかわらず、近親相姦のモチーフがかなり明確に表れている『千枚皮』が、なぜ削除の対象に含まれなかったのであろうか。しかしながら、この疑問は、難解なものではない。それは、『千枚皮』を熟読しさえすれば、容易に氷解する問題である。つまり、『千枚皮』においては、確かに、娘と父親との間における近親相姦の危機が扱われているものの、女主人公である千枚皮は、賢くもこの危機を克服している。近親相姦が実際に行なわれたり、それへの誘惑が描写されるとするならば問題であるが、しかし、その危機を賢く回避する分別ある行動が描写されるとすれば、むしろ、それはグリム兄弟によつても、推奨されるべき物語ということになるであろう。

加うるに、『千枚皮』がペローの『ろばの皮』から影響を受けているとはいえ、『千枚皮』には、『ろばの皮』と比較してみると、はるかに明確な童話形式が与えられている。それは、『千枚皮』において、「童話の三進法」が明確な形で、繰り返し用いられていることによっても裏付けられている。千枚皮は、父親から三着の豪華な衣装を受け取り、父親の城を去るに当たっては、三つの宝を携える。そして、これらの衣装と宝を、三度の舞踏会において用いるのである。これに反して、『ろばの皮』において女主人公は、確かに、父親から三着の豪華な衣装をもらうのであるが、しかし、これらを身に付けて、三度舞踏会に参加する訳ではない。ろばの皮は、締め切った台所の片隅で、豪華な衣装を身に着けた自分の姿を鏡に映して楽しんでいただけなのである。そして、この姿を、偶然こっそり鍵穴から覗いた王子が、美しいろばの皮にすっかり魅了されてしまうのである。ただし、『ろばの皮』において看過してならないことは、ろばの皮が「鍵穴を通して自分の姿が王子によって覗かれることに気づいていた」という点である。作者ペローは、断定的ではないものの、この点をこの韻文で書かれた童話の中で、次のように明確に指摘している。

へ仕事をする際に王女が少しばかり慌あわてたため、

高価な指輪の一つが偶然指からすべって

パンだねに落ちたと伝えられています。

けれども、この物語の真意に通じていると思われる人びとは

指輪はわざと入れられたのだと言いきります。

率直に申せば、わたくしはあえてこの説を信じたい、

王子が扉に近づいて

鍵穴から眺めた時、

「ろばの皮」が気づいていた、と確信していますから。

こういう点にかけては女性はまことに機敏

目の動きもす早いので、

見たことを気づかれずに

女性を見ることなど一瞬たりともできません。

さらにまた確信しています、誓ってよろしい、

若い恋人の手にたしかに指輪が渡ることを

「ろばの皮」は疑いもしなかった、と。<sup>(20)</sup>

「ろばの皮」は、王子のために作るパンケーキに「わざと指輪」を入れるのであるが、この指輪を発見した王子は、この指輪がその指にぴったりとはまる女性を探し求めるのである。この指輪のモチーフは、『灰かぶり』における「上靴」ないし『シンデレラ』における「ガラスの靴」のモチーフの異形である。ところが、『千枚皮』においては、この種のモチーフは、全く見られない。千枚皮は、王に対する三度の積極的挑戦を通じて、自分の魅力によって独力で王の心をつかえるのである。千枚皮は、まさしく「行動派の女性」、「一直線に標的に命中し、破壊する」<sup>(21)</sup> 弾丸のイメージをもつ「パンチのきいた女性」(ein rasantes Weib) という印象を与える。弾丸は、まさしく「鉄の意志」をもっている。

## 第六節 グレート・マザーへの鉄の意志

近親相姦の危機を避けるために、入手困難な三着の衣装を父親に要求するという方策を考えだすところから判断しても、千枚皮は、すでにこの段階で、ある程度の智慧を身に付けた「聖女」という印象を与える。そして、他国の王の城では、汚れて醜い千枚皮として、台所であらゆる辛い仕事に堪え続ける。注目すべき点は、ここで千枚皮の不平不満や愚痴は、全く聞かれないということである。そうして、宴会の機会を利用して、王の注目を引くために、千枚皮は、所持している三着の衣装と三つの道具を有効に利用する。

男性の関心を引く有効な方法を、千枚皮は、明確に心得ていると言わねばならない。最初の宴会で千枚皮は、「お日さまのように金色に輝く衣装」を身にまとう。これによつて千枚皮は、宴会に参加したどの女性よりも、王の注目を引くことに成功する。二回目には、「お月さまのように銀色に輝く衣装」を身にまとう。最後の三回目には、「お星さまのように青白く輝く」衣装を身にまとう。このように、初めは最も輝きの強い金色の衣装を、次にそれよりも輝きの弱い銀色の衣装を、そして最後に最も輝きの弱い青白い衣装を身にまとうのである。ここで、なぜ、その逆の着方をしないのであるのかという疑問がわいてくる。一般に、漸層的に、輝きの弱い衣装から輝きの強い衣装へと移っていった方が、より効果的ではないかという印象を受けるのであるが、しかしながら、ここでは千枚皮自身の美しさを忘れてはならないであろう。つまり、物質的な衣装の輝きが弱くなるにつれて、逆に、千枚皮の美しさそれ自体は、益々強調されて、王に一層強烈な印象を与えることになるのである。男性の心を捕える確実な方法を、千枚皮は、ここで実践している。従つて、物質的な輝きが弱くなるにつれて、逆に精神的な輝きが増してくる方法が選ばれていると言える。これは、童話の本質的形式に属しているものである。



灰かぶり、家族の者たちと同様に舞踏会に参加したいという願望は、単なる好奇心や平等の権利の主張とばかり解釈してはならぬであろう。「舞踏」への衝動は、極めて人間的なものである。舞踏は、本来古代の呪術と関係をもっていたと言われるが、この行為は、そもそも人間の「創造的進化」への欲求から生ずるものであり、極めて人間的な衝動であると解釈されうる。<sup>(22)</sup>このことから判断すると、成長に伴って灰かぶりの内面には、抑えがたい自己実現への願望が芽生え始めたと考えられる。他方において、千枚皮には、未だ「有能な男性」の段階にいる王を、これら三回の試練を通じて、「老賢人」のレベルにまで引き上げようとしている節が見られる。千枚皮はといえば、近親相姦の危機の克服と台所女中としての試練を通じて、すでにグレート・マザーのレベルまでに到達していると考えられる。千枚皮は、グレート・マザーに必要な「忍耐」も「勇気」も兼ね備えている。それどころか、彼女は、「自己卑下の謙虚さ」も「男性を籠絡する知略」をも兼ね備えている。こういった、ある意味では完成された女性であることを、「金の髪」が象徴しているのであると結論づけられるのである。

この物語の結末において、千枚皮が王の花嫁になるとき、読者は、改めて千枚皮の美しさに驚かざるをえない。しかし、醜い千枚皮の下から現れる、金髪に包まれた姫の美しさは、彼女が近親相姦の危機を克服したことや、種々の辛い仕事に堪えたその忍耐、そして、所持する道具を用いて意中の王の心を射止めたということから発しているというよりは、むしろ、彼女のグレート・マザーになるという鉄の意志表示からくるものであると言わねばならない。恋人をめざして一直線に進む弾丸のような千枚皮の鉄の意志を、神をめざして一直線に進む人間の姿と重ね合わせるとき、そこには崇高な畏怖の念さえ生じてくる。これによって、女性の読者は、彼女を人生の模範としようという衝動に駆られると共に、男性の読者は、グレート・マザーのような千枚皮を花嫁として獲得できるような老賢人になろうという意を益々強められるのである。

## 注

(1) 『日本大百科全書 二二』小学館、東京一九九四年、四四二頁。

(2) 同所。

(3) 同所。／プラトンの『法律』(第一卷)において、「アテナイからの客人」は、次のような考えを述べている。

へでは、今の話を、次のように考えてみましょう。わたしたち生きものはみな、神の操り人形だと考えてみるわけです。もつとも、神々の玩具としてつくられているのか、なにか真面目な意図があつてつくられているのか、それは論外としてね。なぜなら、そんなことは、わたしたちに認識できることではありませんから。だが、次のことなら、わたしたちにもわかっているのです。

わたしたちの内部には、以上の情念が、まるで、なにか腱や絃のように置かれていて、わたしたちを引っ張りまわし、しかもそれらが互いに対立しているものですから、相反する行為へと互いに引っ張り合う、ということなのです。じつにそこが、徳と悪徳との明瞭な分かれ目になるのです。というのも、この議論の語るところによれば、各人はつねに、引く力のなかの、或る一つのものに従い、いかなる場合もそれから離れぬようにしながら、他の多くの腱に抵抗しなくてはならないのです。そしてその一つの引く力こそは、思考の能力(ロギスモス)という、黄金でつくられた神聖な導きであり、国家の場合には、「共通の法律」と呼ばれるものなのです。これに対し、他の多くの引く力は、硬質で、鉄よりできていて、ありとあらゆる形態をとっています。しかし、さきの一つの導きは、なにぶんにも黄金でできているため、しなやかなのです。そこで、法律という、最高に見事なこの導きに対しては、ひとはつねに協力しなくてはならない。というのも、思考の能力は、見事なものであつても、反面優しく、力を用いて強要してくるものではありませんから、その黄金の種族が、わたしたちの内部で他の種族に打ち勝つためには、その思考の導きを助ける補助者が必要となるのです。(『プラトン全集二三』向坂寛・森進一・池田美恵・加来彰俊訳、岩波書店、東京一九七六年、一〇一—一〇二頁)

「わたしたち生きものはみな、神の操り人形だ」という比喩は、慎重に解釈されねばならぬであろう。例えば、人間が操り人形を操作する場合、操り人形は、人間の意志に逆らうかのように、往々にして人間の意志に反する予期せぬ動きを取る。人間の予期に反したこの思わぬ動きが、むしろ、操り人形を興味深いものとしていふと言わねばならない。操り人形のこの予期に反したこの思わぬ動きが、ある意味においては、人間の「自由意志」と呼びうるものなのではなからうか。この種の「自由意志」は、その他

の「生きもの」はともかく、「神の似姿」と言われる人間には、部分的ながらも与えられていると思われる。この「自由意志」とは、このプラトンの『法律』との関連においては、まさしく、「快樂」「苦痛」「恐怖」「大胆」といった「人間の情念」に相当するものと言えるであろう。しかしながら、逆に、人間がそのような情念の嵐にのみ翻弄されるとすれば、人間は、その存在の制御を失い、存在の荒海に翻弄されて、当てどなくさまよう小舟のごときものとなり、早晩海の藻くずと消える運命にあると言わざるをえない。しかし、神は、その「操り人形」である人間を、「思考の能力」（理性）という黄金の糸でもって、自らの手と結び付けることによって、導いていると考えられる。この導きに従い、人間がその黄金の糸をたどって行く先とは、人間の理想的存在であり、最終的には、神の手元に他ならない。

- (4) アリストテレス『詩学』藤沢令夫訳、『アリストテレス』（世界の名著八）所収、田中美知太郎・責任編集、中央公論社、東京一九七二年、二九四―二九五頁参照。
- (5) アリストテレス、同書、三〇〇頁参照。
- (6) E・アウエルバッハ『ミメーシス』（上・下）篠田一士・川村二郎訳、筑摩書房、東京一九七五年参照。
- (7) R・I・エヴァンズ『ローレンツの思想』日高敏隆訳、思索社、東京一九七九年、一七―三三頁参照。／コンラート・ローレンツ著『ローレンツの世界——ハイイロガンの四季——』日高敏隆監修、羽田節子訳、日経サイエンス社、東京一九八九年参照。
- (8) Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. 3 Bde., Philipp Reclam jun. GmbH & Co., Stuttgart 1980, 1.Bd., S.350. 以下、この童話からの引用は、この版に従い、本文引用末尾に頁数を付す。なお、翻訳に当たっては、次の最終版の翻訳を参考にさせて戴いた。『グリム童話集（二）』金田鬼一訳、岩波書店（文庫）、東京一九八一年、一七六―一八二頁。／『完訳グリム童話』（一―七）第三卷、野村滋訳、筑摩書房、東京一九九九年、二〇三―二二二頁参照。
- (9) ユング、『夢の本』（別冊宝島五）、JICC出版局、東京一九八二年、二二頁参照。
- (10) Vgl. Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen, a.o., S.471-472.
- (11) アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』山下主一郎他訳、大修館書店、東京一九八八年、「指輪」については五二五―五二七頁、「糸車」と「糸巻」については一七五頁、五九六―五九七頁参照。
- (12) ヨアヒム・ブムケ『中世の騎士文化』平尾浩三・和泉雅人・相澤隆・斉藤太郎・三瓶慎一・一條麻美子訳、白水社、東京一九九五年、三六一―五三九頁参照。

- (13) オットー・ボルスト『中世ヨーロッパ生活誌一・二』永野藤夫・井本日向二・青木誠之訳、白水社、東京一九八五年、第二巻、八一頁。
- (14) ペーター・ラインシュタイン『バロックの生活』波田節夫訳、法政大学出版社、東京一九八八年、六四―六七頁参照。なお、宮廷社会における「礼儀作法と儀式」に関しては、次の文献を参考のこと。ノルベルト・エリアス『宮廷社会』波田節夫・中埜芳之・吉田正勝訳、法政大学出版社、東京一九八一年、一二―一八八頁参照。
- (15) Vgl. Bolte, Johannes / Polivka, Georg: Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm. 4 Bde., Georg Olms Verlag, Hildesheim · New York 1982, 2. Bd., S. 45.
- (16) Vgl. ebenda, S. 45-47.
- (17) 『ネズミの皮の姫』は、次のような物語である。『初版グリム童話集二』吉原素子・吉原高志訳、白水社、東京一九九七年、一五七―一五八頁。

へある王さまに娘が三人ありました。そこで三人のうち誰が一番自分を愛しているか知りたいと思って、三人を呼んでたずねました。一番上の娘は、この王国すべてよりも愛している、と答えました。二番目の娘は、世界じゅうの宝石と真珠よりも、と答えました。ところが三番目の娘は、塩よりも愛している、と答えました。王さまは、三番目の娘が自分への愛をあまりにも安っぽいものと比べたので、腹を立てて、召し使いに引き渡すと、森へ連れて行って殺してしまえ、と命じました。ふたりが森へやってくる、お姫さまは召し使いに、命を助けてください、とたのみました。召し使いはお姫さまに忠誠心があったので、いづれにしても殺してしまうことはなかつたでしょう。召し使いはさらに、いっしょにお供して、お姫さまの命ずるままに従いたい、と言いました。ところがお姫さまは、ねずみの皮の服のほかにはなにもいらぬ、と言いました。召し使いがねずみの皮の服を持ってきて渡すと、お姫さまはそれにくるまって出かけていきました。お姫さまはまっすぐとなりの国の王さまの屋敷へ行くと、男だと嘘をついて、雇ってくれるよう、王さまに願い出しました。王さまはそれを聞き入れ、自分の身の回りの世話をするように命じました。晩になるとお姫さまは王さまの靴を脱がせなければなりません。すると、王さまは決まって靴をお姫さまの頭に投げつけました。あるとき王さまがお姫さまに、どこから来たのか、たずねました。――「人の頭に長靴を投げつけたりしない国から」。それから王さまは気をつけるようになりました。そうこうするうちにほかの召し使いたちが王さまのところへ指輪を持ってきて、これはねずみの皮がなくなりましたので、たいへん高価な指輪です、きつとどこかで盗んだものにちがひありません。

ん、と言いました。王さまはねずみの皮を呼びつけると、この指輪をどこで手に入れたのか、聞きました。そこでねずみの皮はこれ以上隠していることができなくなつて、ねずみの皮を脱ぐと、金色の髪があふれ出ました。そしてたいへん美しい娘があらわれました。ほんとうに美しかったので、王さまはすぐに頭の王冠を取ると、娘にかおせました。そして、娘を嫁にする、と宣言しました。

結婚式にはねずみの皮の父親も招かれました。父親は、娘はとつくに死んだものと思っていました。それで自分の娘だとはわかりませんでした。父親の前のテーブルにはごちそうが運ばれましたが、どれも塩が入られていませんでした。そこで父親は腹を立てて、「こんな料理を食べるくらいなら死んだほうがましだ！」と言いました。父親がそう口にする、お妃が言いました、「塩がなければ生きてるのもいやだなんて、今さらよくも言えたものですね。塩よりもあなたを愛しています、と言つたといつて、わたしを殺すように命じたのに！」そこで父親は、お妃が自分の娘であることに気づいて、キスをして許しをこいました。自分の王国や世界じゅうの宝石よりも、自分の娘にいま一度逢えたことのほうが、父親はうれしく思いました。〽

(18) シェイクスピアの『リア王』では、リア王の長女ゴリネルと次女リーガンは、心にもない追従をリア王に言う。しかしながら、三女のコーディリアは、嘘偽りのない本当の気持ちでリア王に告げる。とはいえ、このコーディリアこそが、三人の中で最もリア王を愛しているところ、リア王には真実を見抜く洞察力がない。追従に弱い愚かなリア王、長女と次女の野望と嫉妬心、コーディリアの父親に対する愛がぶつかりあつて渦を成し、そこから悲劇が生まれ、そして、最終的にリア王は悲劇的な死を遂げる。

(19) ジョン・M・エリス『一つよけいなおとぎ話』池田香代子・薩摩竜郎訳、新曜社、東京一九九三年、一二九―一四一頁。

(20) 『ペロー童話集』新倉朗子訳、岩波書店、東京一九八二年、一二五―一二六頁。

(21) 拙論「日独語源俗比較の試み——パンチのきいた女と小股の切れ上がったいい女——」鹿児島大学法文学部紀要「人文学科論集」第四一号所収、鹿児島一九九五年、一八五―二〇八頁参照。

(22) 『夢の本』、上掲書、一六六頁参照。

(23) Vgl. Drewermann, Eugen: *Aschenputtel*. Walter-Verlag, Solothurn und Düsseldorf 1993, S.65. / アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』、上掲書、一六四―一六六頁参照。